

# 開拓者の暮らしと川

地域産業  
環境

第1章 十勝の平野や  
川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



げんしりん かいたく にゅうしょくしゃ しんとくちょうにいらい  
原始林を切り開いて開拓する入植者たち(新得町新内: 明治時代の終わりころ)。  
(写真: 『十勝川写真で綴る変遷』より)

はじめのころ、開拓者たちの多くは川ぞいの開拓地に入りました。

川ぞいは土が肥えていること、高台に比べれば木が固くなく少なくて切り開きやすいこと、などが理由でした。

しかし、川ぞいの土地にも、今あるものよりずっと太い、ヤチダモ、クルミ、ドロノキといった木々が生いっけています。中には、直径2mくらいのものもあったといひます。

木があまり無いところは湿地帯で、背の高さの倍もあるカヤやヨシなどが、ビッシリと生えていました。カヤの根がからんだ大きな固まり(谷地坊主)もあります。

クワ、ノコギリ、おのなどのかんたんな道具で切り開くのは、大変なことでした。



にゅうしょくしゃ ていど  
入植者たちは、ある程度落ちつくと、自分たちの手で小屋を建てた。  
(幕別町ふるさと館展示: 1)

## 川のほとりで小屋づくり

開拓地に入った人たちは、まず、川ぞい(や沼のほとり)の草地に、ヨシやカヤをかり取って、かんたんな小屋を建てました。毎日の生活には飲み水など生活用水が必要であり、ものを運ぶには川舟を使うためです。( 最初の家 p167)

生活用水をとる川の水は、雨が降るとにごって使えなくなる場合もあります。山際にわく湿地の水をくんで使うこともありましたが、くさみがあり、遠くから運ぶのは大変だったといひます。

近くの人たちと力を合わせて井戸をほり、そのそばに共同の風呂を建てたところもありました。

## 川に痛めつけられる

川の近くの土が肥えているのは、川が運んできた上流の土と栄養分が「洪水の時に」たまるためです( 氾濫原 p46)。作物はよく育っても、洪水になれば水につかる場所でした。洪水のたびに、開拓者たちは痛めつけられました。( 洪水 p186)

洪水のために、せつかく開いた土地をあきらめ、高台に移り住む人もたくさんいました。

また、橋ができるまでは、かんたんには川をわたれません。舟を利用するか、浅いところを探さなければなりません。学校ができた時、川の対岸に住む生徒のために渡船場( p176) がつくられたこともあります。



こうずい かいたくち たかしまのうじょう いけだちょう  
洪水によって水につかる開拓地。明治44年(1911)、高島農場(池田町)。  
(『池田町懐かしのアルバム』より)

1 幕別町ふるさと館(まくべつちょうふるさとかん): 幕別町依田 384-3(依田公園横)  
電話 0155-56-3117 月・火曜日休館

## 川に助けられる

なかなか開拓が進まず、あるいは凶作などで作物がとれないような時でも、川の魚によって飢えから救われ、お金を手に入れることができました。

ウグイなどの小魚はたくさんいます。上流～中流では、ヤマメ（ヤマベ）がたくさんとれました。

中流～下流部では、海から産卵のためにのぼってくるシシャモで、十勝川が真っ黒になるほどだったといわれています。

川をさかのぼったサケやマスをとるのは、禁止されていたのですが、実際には多くの人にとっていたようです（p146・サケの人工ふ化 p174）。

魚は、始めのうち、アイヌの人と物々交かんで手に入れ、やがて釣りやワナ、網などでつかまえるようになりました。



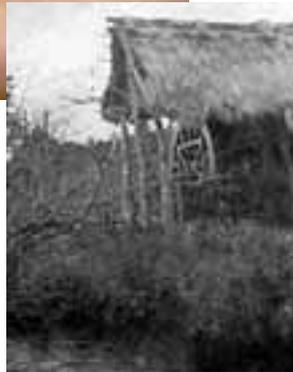
(上) 冬をこすために、川をのぼるウグイの群れ（下頃辺川・浦幌町）。



(右) 産卵するために川をのぼるシシャモのオスは黒くなる。



(上) キビ（もちきび）。栄養は豊富で、今でも米に混ぜてたかれる。



(右) 福井団体のリーダー青山奥左衛門は明治31年(1898)、米作りに成功した。写真は、精米のための水車小屋(十日川・池田町)

(下写真:「池田町懐かしのアルバム」より)

## 米作りと川

開拓者たちが米のごはんを食べることができるのは、正月（とお盆）くらいしかありませんでした。イナキビや麦、ソバなどが毎日の主食だったのです（季節によってはジャガイモやトウモロコシなどもありました）。

開拓者たちにとって、ふるさとで食べていた米のごはん、そして米作りは大きな夢でした。

水田には水があるので川から引きます。ただ、水温が低いと、なかなかうまくいきません。失敗しながら、ため池をつくるなどの工夫によって、少しずつできるようになりました。

川の水で水車を回し、その力で精米したところもありました。

## 朝夕の魚とり ... 遊びでもあり仕事でもあった

大正5年(1916)に、様舞尋常小学校(池田町・のちの様舞小学校)を卒業した、奥田実太郎さんのお話です。

「休み時間には狭い廊下や教室で、女子は袋の中に小豆を入れて作ったお手玉つき、男子は竹割りやパッチをし、外では金輪の独楽で遊んだ。

冬は自家製の手籠で学校の坂や、部落会館の裏の植樹地が畑であったのでそこで滑った。

春は桜やコブシの花見、山ではリリー(スズラン)狩り、ワラビ、フキ、ウドの山菜を取ったり、秋はブドウ、コクワやマイタケを取りに行った。

利別川には朝夕、ハエナワをかけ、アカハラ、カチカ、イトウを釣り、四線の小川ではタモで雑魚を掬った。

ハエナワの餌は四線の小川でドジョウや八つ目ウナギを取り、畑の古切株の根を掘ってカブト虫の幼虫を取った。それが放課後の一つの仕事でもあった。

北二線の沼にはよくフナ釣りにいったものである。利別川に泳ぎに行くことは祖母がやかましく禁じていたので行かなかった、それで今も泳げない」

(「様舞小学校開校記念誌『鑽仰』」より。一部改変)

(「池田町開拓夜話」)

2 ハエナワ(延縄):長いロープにたくさんの釣り針をたらしめて魚をとる方法。